

『生活文化研究所報告』第四十八号
二〇二二年三月刊 別刷

深栖氏系図再考

佐々木 紀一

深栖氏系図再考

一、従来の深栖氏研究

筆者は以前、『尊卑分脈』及びそれ以外の中世成立清和源氏系図（北酒出本・菊大路本）より、深栖氏の歴代を考証した事があつた（1）。同氏については『平治物語』に、下総国の者で「兵庫頭頼政とこそ昵候へ」とある「深栖三郎光重か子に陵助重頼」が登場し（九条本巻下）（2）、少年時代の義経を鞍馬より連れ出し、寄留させたとする。また金商人随従説（3）と縫合し、人物関係も崩れるが、『義経記』（4）の伝承も同氏との関わりを挙げ、文学・歴史研究から近年、注目される様に（5）、空白の多い義経伝記上看過出来ない筈である。しかし寄留の事実が確認できない事は勿論、従来の研究の史料は何れにしろ、新訂増補国史大系の『尊卑分脈』の深栖氏の記載が全てであつた。そこでは同氏が頼国子孫の複数個所（A頼資流、B頼綱流、及びBの中に含まれるC頼茂流）（6）に釣られ、族人とその関係は必ずしも一致しなかつた。筆者は、B頼綱流及び美濃源氏の光信の脇書から、光重を美濃源氏の光信子とする記事は、他の中世系図の脇書の呼称から誤りで、同諱の別人であらうとした（7）。

（関係図）

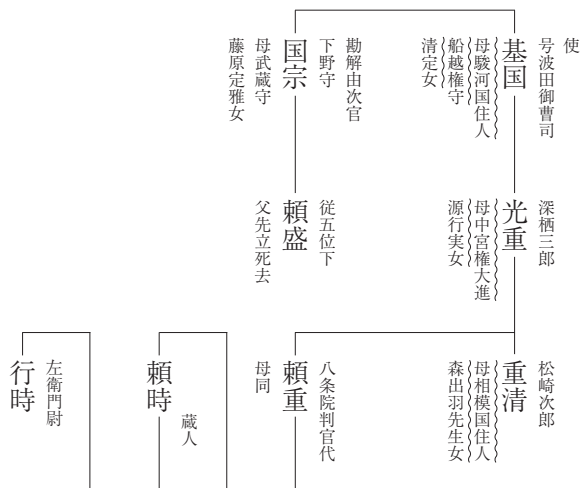


また子孫は鎌倉御家人となり（8）、『宇野文書』『宇野氏系図』（9）に、その族人が一部確認される事を確認したが、依然、関係史料は少なかつた。

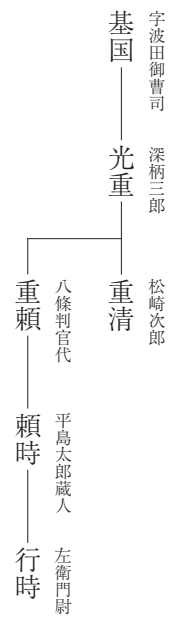
二、『渋川系図』による知見

しかし迂闊な事に、拙稿①の後、新たに同氏を載せる中世系図の存在に気付いた。一は九州探題渋川氏に伝来し、室町時代中期には成立してゐた清和源氏系図の『渋川系図』（10）で、簡略且つ『尊卑』に近いが、記事は異なる所がある。

（『渋川』）

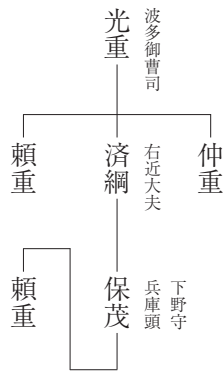


浅羽本『足利土岐系図』(11)



とあり、浅羽本が同じ記載を持つが、両系図を遡る系図が存在したと推定した⁽¹²⁾。頼重・頼時はA頼資流・B頼綱流に見えるが、行時は他系図に未確認である。

同系図では頼国流頼資の子として挙げるのみで、美濃源氏との関係についての言及もなく、基国に「波田御曹司」とあり、北酒出本と『尊卑』の如き系図を取り合はせた『清音寺藏佐竹并諸家系図』⁽¹³⁾では、頼綱流に釣られるが、



と、そこでも「波多」であり、『尊卑』B頼綱流光重と一致しない。相模の波多野郷・同庄は余綾郡に属するが、二十巻本『倭名類聚抄』巻六「国郡部」の一部伝本に「幡多」とあり⁽¹⁴⁾、ハタの標記が可の如くだが、高山寺本では「幡多野」とあり⁽¹⁵⁾、『吾妻鏡』他でも「波多野」と表記される。以上からすると、『尊卑』の「波多野」より、光重と相模国波多野庄との有縁を自明として論ずる事は出来ないだらう。

また前掲『洪川』の頼重に「八条院判官代」と有る点、平治の乱後、源

氏の結節点であつた⁽¹⁶⁾頼政有縁の源氏に共通し注目されるが⁽¹⁷⁾、他系図には見えず、基国に検非違使を示す「使」がある点、『洪川』の記事も十全ではなく(後掲北酒出本の「後」を誤つた可能性があるが)、個々検討が必要だが、各人の母を検討するに、基国母の船越権守清定は、『尊卑』藤原南家工藤氏⁽¹⁸⁾の「入江権守清定」に比定可能である。兄弟と子が「船越」を名乗るからである⁽¹⁹⁾。

また光重母の父は、『尊卑』に近い『源氏諸流系図綱要』⁽²⁰⁾系本の中、『諸家大系図』四(以下、『大系図』四)に仲政子として、(その子孫は無いが)、

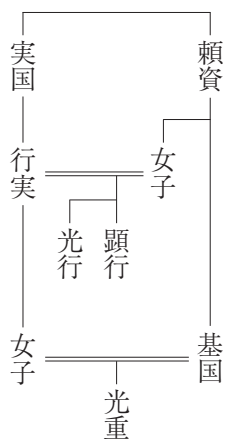
深柄三郎
光重 深柄院
母中宮牛大進源行家|女

とあり⁽²¹⁾、両系図を遡る系図に存したと考へられ、その母は後掲北酒出本の「母叔父実国弟女^(兼光)」と同人と思はれるが、これは『後二条師通記』(大日本古記録)・『為房卿記』寛治五年八月六日条⁽²²⁾に中宮権大進行実とある人物である。源姓が確認され⁽²³⁾、『尊卑』北酒出本⁽²⁴⁾には「中宮権大進」の官が見えないものの、別に郁芳門院院司として、『中右記』永長元年八月十五日条裏書(大日本古記録)に、

源行実子
顯行

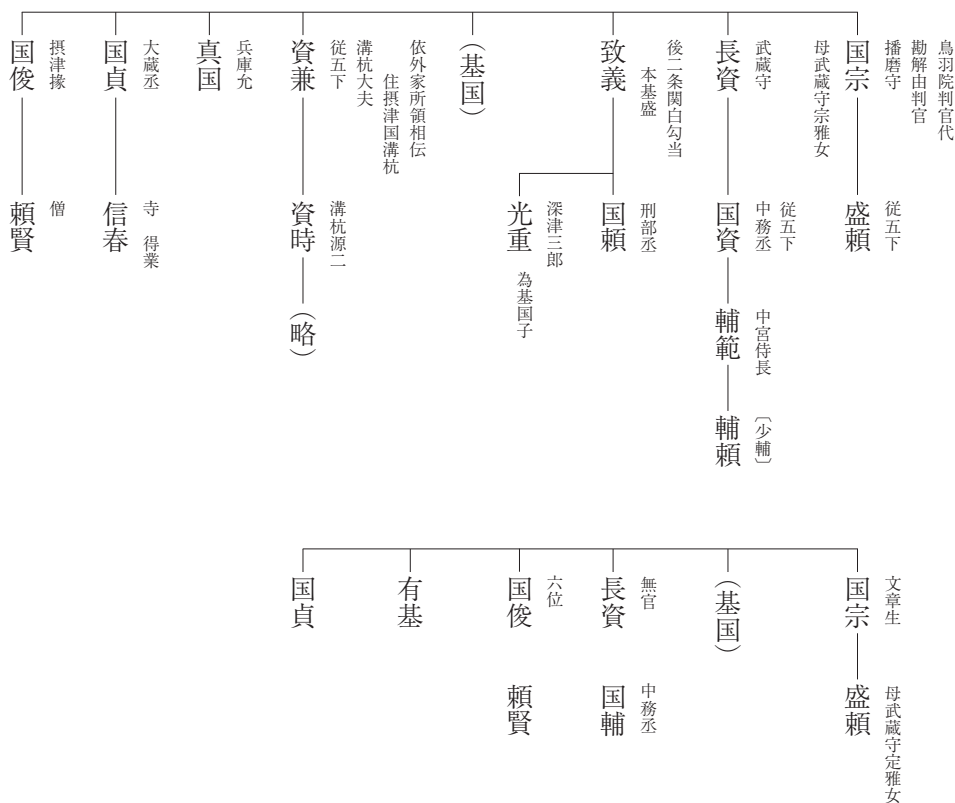
とある事からして、基国の従兄弟に当たる人物と確認出来、『尊卑』・北酒出本に拠れば頼資女子が行実の室でもあり、一門内の縁組と解される。

(関係図)

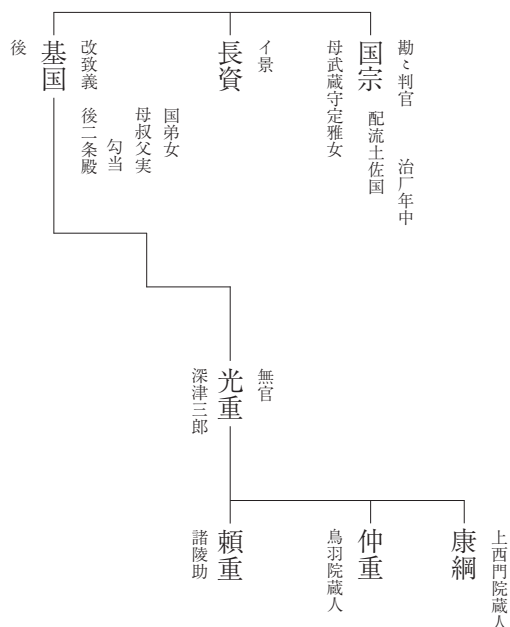


（『尊卑』A頼資流）

(菊大路本)



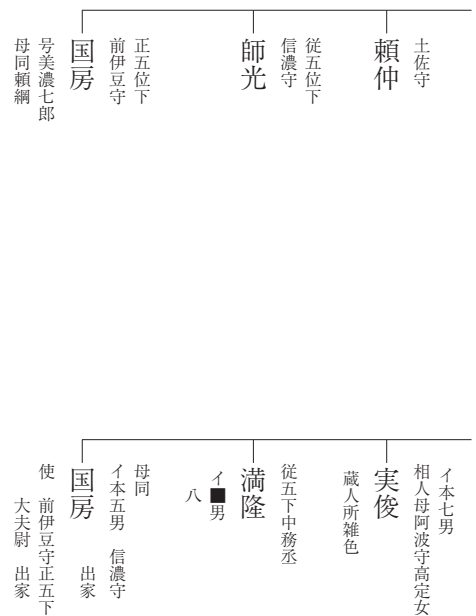
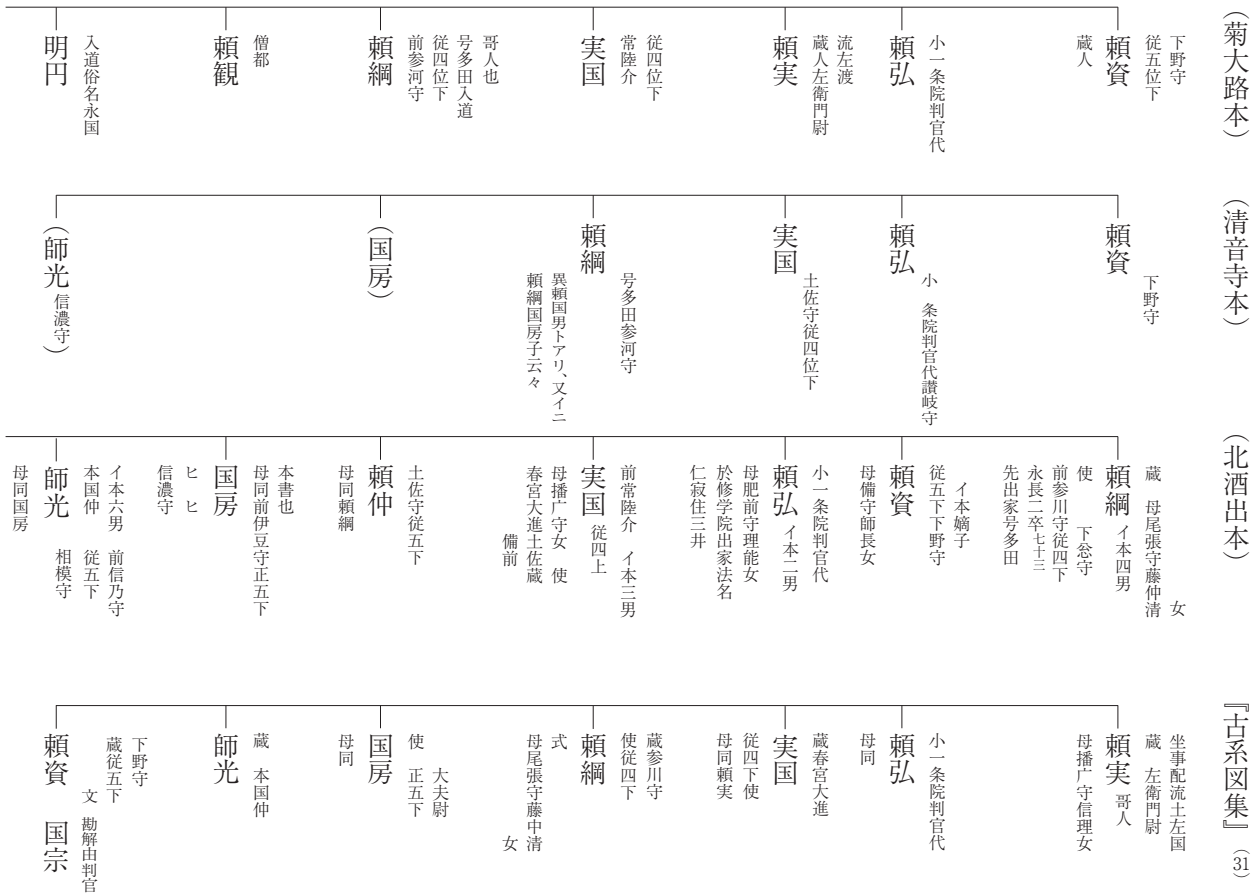
とあり、溝杭氏以外の子孫が見えず、その他の男子の系統も数代で見えなくなる。『尊卑』・『洪川』では諸国の守になつた者も有る事に成るが、記録に確認出来ず⁽²⁷⁾、『尊卑』に近い菊大路本では、無官または諸司の丞の記載しかない⁽²⁸⁾。北酒出本（A頼資流）でも、同内容が重複して掲載されるが、



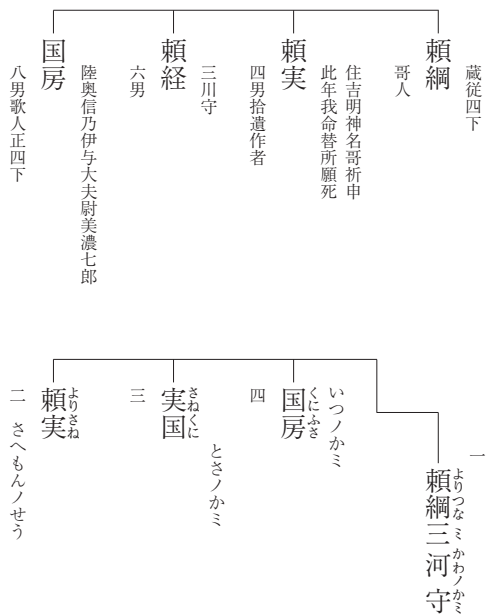
とあり、『尊卑』の致義と基国が同一人物とされる事が注目されるが、これにも国司の記載がない⁽²⁹⁾。以上からすると、頼資流はその子以降、官人としての地位が急激に低下したと考へられる。頼資流罪の影響の可能性があるが、その中で地方武士となる事で活路を見出したのが、深栖氏流（及び溝杭氏流）と言ふ事になる。

三、頼資の位置

更に注意すべきは頼国子の中の頼資の位置である。大系本『尊卑』では頼弘の次に挙げられ、多くの男子の中の一人であるが、中世系図では、頼



また、土岐章氏蔵『当方之系図』⁽³²⁾では、頼綱と頼経を別人とするが、『源家けい』



とあり、上杉博物館蔵『源家けいづ』⁽³³⁾を見ても、兄弟順に関心のあつた事が分かるが、長幼順、官職が系図間で一致しない。

他の史料では、鎌倉時代の上覧の『和歌色葉』六の「名譽歌仙者」⁽³⁴⁾には、「三河守源頼綱 同六男」とあり、頼実の歌集『故侍中左金吾歌集』⁽³⁵⁾に付せられた勘記に、

正四位 右馬頭頼国朝臣二男

長久四年正月九日補藏人所難色廿九

寛徳元年六月七日卒 年廿

とあり⁽³⁶⁾、頼実が二男となる⁽³⁷⁾。また『台密血脈譜』⁽³⁸⁾には、

明助 摩尼房阿一
頼国二男頼弘息

明円 密嚴房阿一
頼国五男
家国入道

と、頼弘が二男で、明円が五男と見える。但し以上の史料からは頼資の長幼順は確定できず、頼実と頼弘を共に二男とする等、史料間の相違もあり、同時代の古記録より勘案すべきであらう。

一族に歌人が多いから、和歌研究者による伝記考証を参照すると⁽³⁹⁾、頼国子の中では、国房が七郎を称した事が判明し、系図（大系本『尊卑・菊大路本』）と一致する⁽⁴⁰⁾、また嫡流を継いだ頼綱は、『中右記』永長二年（一〇九八）閏正月二十七日条に「年余七旬」とあり、井上氏論では『尊卑』記事を勘案して万寿元年（二〇二四）の生まれと推定する。対して『実国』は、承暦四年（一〇八〇）に、

前常陸介実国朝臣出家云々〔年六十一〕⁽⁴¹⁾

とあるから、寛仁四年（二〇二〇）の生まれである事が分かるが、頼資は不明。しかし官途を見るに、頼資は長暦二年（一〇三八）に「藏人」⁽⁴²⁾、同三年に「藏人左衛門尉」⁽⁴³⁾とあり、永承四年（二〇四九）～七年の間、「斎院次官」⁽⁴⁴⁾、天喜三年（一〇五五）十一月に五位⁽⁴⁵⁾、康平五年（一〇六二）に下野守に在任⁽⁴⁶⁾。

頼仲は、「永承〔四一七〕年九月十九日関白左大臣頼通家藏人所歌合」に「源頼仲」とあるから無官。『定家記』天喜三年（一〇五五）十一月五日条にも六位とあるのみ。その間か、「玄蕃助」に補任⁽⁴⁷⁾、治暦三年（一〇六八）には右衛門尉で⁽⁴⁸⁾、藏人か⁽⁴⁹⁾。その後、『為房卿記』延久五年（一〇七三）正月三十日条に「頼仲任越後守」とあり⁽⁵⁰⁾、『中右記』長治二年二月二十八日条に「土佐入道頼仲」⁽⁵¹⁾とある。

前掲『実国』は、永承二年（一〇四七）に六位藏人に補せられ、前官は「大膳亮」⁽⁵²⁾、永承四年「藏人左衛門少尉源実国」⁽⁵³⁾、永承五年（一〇五〇）～天喜二年（一〇五四）の間の廿卷本歌合「大宰大貳資通歌合」では「筑前権守」〔大成〕一五八、康平四年（一〇六一）「前土佐守実国」⁽⁵⁴⁾と見え、極官は前掲の通り「常陸介」である。

頼綱の経歴を見るに、長元八年（一〇三五）五月十六日「関白頼通家歌合」⁽⁵⁵⁾に「小舎人」として奉仕し、後冷泉天皇（寛徳二年〔一〇四五〕～治暦四年〔一〇六八〕在位）藏人⁽⁵⁶⁾、天喜四年（一〇五六）には「修理亮」⁽⁵⁷⁾、康平三年（一〇六〇）には「越後権守」⁽⁵⁸⁾、以降、下総守⁽⁵⁹⁾、三河守⁽⁶⁰⁾を歴任する

国房は、承暦三年（一〇七九）九月では「散位」⁽⁶¹⁾、永長元年（一〇九六）正月に伊豆守に任⁽⁶²⁾、次いで信濃守⁽⁶³⁾、康和元年（一〇九九）正月に常陸介に任⁽⁶⁴⁾、長治元年二月以前に出羽守（前出羽守源国房出家）⁽⁶⁵⁾に任。

師光は初名国仲とすれば、廿卷本歌合断簡「承保二年九月内裏歌合」〔大成〕一九九に「藏人左衛門尉国仲」と見え、師光としては永長元年（一〇九六）六月七日、文章生より信濃守に補せられた源師光⁽⁶⁶⁾が相当し、永保二年（一〇八二）に相模守の秩満を迎へ⁽⁶⁷⁾、『勅撰作者目録』に、「五位信濃守、美濃守源頼国男、至康和二年」⁽⁶⁸⁾とある事からすると、康和二年没か。

勿論、個別の事情が働くとしても、六位蔵人任官の時期を見るに、頼資、頼実、(頼綱・実国)・師光の順で、以下の官途も履行するから、長幼順と同じとして良く、頼資の生まれが早いと考へられる。

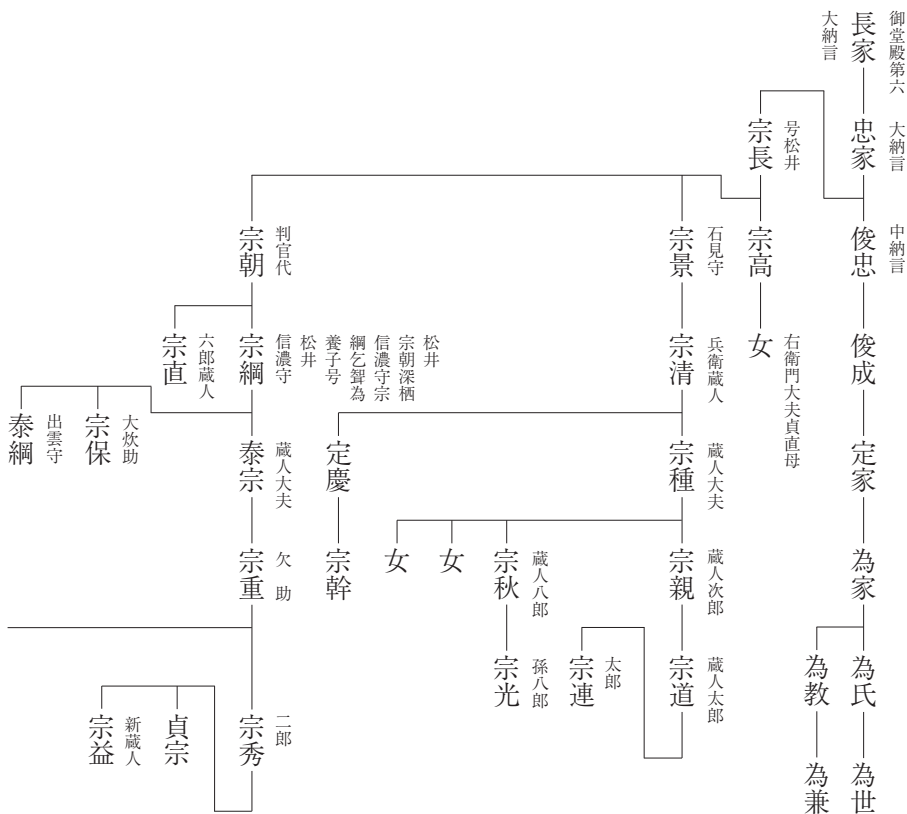
問題は『尊卑』が長子とする頼弘との先後であるが、この頼国兄弟箇所では、『尊卑』の後出箇所を指摘できる。正に頼綱の死没記事であるが、前掲の古記録より、永長二年閏正月没を確認できた。然るに大系本『尊卑』では、「永長二七二出家七十三才」とあるのによれば、永長二年七月の十二日に出家し、時に七十三歳と解される。所が古記録より出家は前年三月であるから⁽⁶⁹⁾であるから、大系本『尊卑』の誤りであるが、その形成過程が諸系図比較により分かる。『洪川』・綱要系諸本では「永長二七二卒」と、その日付を死没日時とするのも誤りであるが、これは北酒出本の「永長二卒^{七十三}」が正確で、『洪川』他はその享年を死没月日と誤り、大系本『尊卑』は更にそれを出家の月日と解したものである。此処でも北酒出本の古態箇所を確認できる。

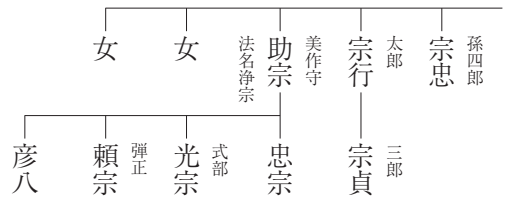
また大系本・佐竹本『尊卑』・『洪川』では播磨守任官とあるが、記録に未確認⁽⁷⁰⁾。然るに北酒出本で、実国の母の注記に「母播磨守女」とある。他系図を参照するに、頼弘・頼実母の「藤原信能女」を指すものであるが、この姓名を欠く異例な注記が、実国の官途「播磨守」と解されたか。

無論、『尊卑』の頼弘記事の成立とは飽くまで別問題であるが、頼弘は小一条院在位期間(寛仁元年〔二〇一七〕八月〜永承六年八月)に判官代となつたとあるが、『尊卑』他の持つ「讃岐守」任官は未確認で、その間の官途も確認出来ないから、疑はしいのではないか。出家記事が北酒出本・『尊卑』に見えるから、仮に長子であるとしても、小一条院判官代を最後に、早くに出家して、何れにしろ頼資が長子の位置にあつたと解するものである。幾つかの中世系図で、深栖氏が正に源氏の長子の家系であつたとするが、同氏は源氏の名門であると認識されてゐたものではないか。

四、『土佐国蠹簡集残篇』の「松井氏系図」

然るに根本的に重要な深栖氏系図が別にあつた。南北朝時代今川氏の配下となり、駿河に土着した松井氏に深栖氏系図が伝来してゐた。松井氏は藤姓であるが、深栖氏より養子を迎へたとある為で、松井氏系図と深栖氏系図の二種類が挙げられる。即ち『蠹簡集残篇』六「松井利兵衛所蔵文書」の「松井氏所伝系図」⁽⁷¹⁾では、





訴訟で幕府より遵行を命じられた「松井太郎」⁽⁸¹⁾、南北朝期の至徳四年（二三八七）、筑後山本郷内の草野孫法師領の濫妨を働いた「松井山城前司」⁽⁸²⁾も族人で、以降も天文元年（一五三二）、幕府より山城の久我家領森分・法久寺の乱妨を防ぐ様、命じられた「松井越前入道」が見えるから⁽⁸³⁾、中世を通じて山城にも存続したと見て良い。

一方で鎌倉期の他史料より系図の記載に確認される人物がある。文治二年（一一八六）に八幡神人を殺害し、土佐に流された松井藏人宗長がそれで、系図で実質、松井氏の祖に位置付けられてゐる人物に相当するとして良い。嘉禎元年に發した石清水八幡宮領薪庄と興福寺陵大住庄の争論の際に作成された『石清水文書（田中文書）』三九「八幡宮寺告文部類第 付薪園之間事」付載「薪莊・大隅莊相論記」所引の「文治二年閏七月九日所司申狀」（大日本古文書）によれば、

去年春、大隅郷住人友弘〔松井藏人宗長親〕、刃傷神人長友長〔八月十五日訴之〕、同為宗長〔今宗知祖父〕、搦取神人頼房、付託禁遏、(下略)惣官別当慶清小舅胤清、依為宗長智宥之、文治三年十二月廿八日慶清死、同四年成権別当候訖、宗長配流土佐国

とある。父が友弘とあるから、御堂関白子孫を称する前掲系図には、端的に従ひ難い訳だが、友弘が八幡神人に刃傷の科で訴へられた事は『玉葉』文治二年八月十三日条に見え⁽⁸⁴⁾、聴取の為に松井藏人召喚の旨が下されたとある事は、『石清水八幡宮文書』『石清水璽宮事裏文書』の「石清水八幡宮文書目録」⁽⁸⁵⁾に確認出来、流罪も『吾妻鏡』文治四年八月十七日条に「藤原宗長、依石清水之訴、去五日被下配流官符、土佐云々」とあり、『玉葉』文治四年七月十一日条にも「宗長〔松井藏人〕」と確認出来るが、更に同十七日条に「御家人藤原宗長」とあり、鎌倉御家人であつた事が知られる。

更に割注に見える宗長孫の宗知は嘉禎の紛争の際、大住庄側の張本人であつて⁽⁸⁶⁾、公卿僉議に於いて「宗朝以下八人〔大隅庄住人〕可召社云々」⁽⁸³⁾

と、召喚が決められるが、

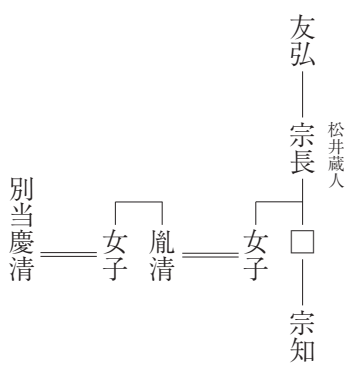
抑宗友者、先日被召候之時、暗跡逐電之由風聞之處、如宗末法師白狀者、今度鬭諍之時、為誘宗末加種々之下知云々⁽⁸⁸⁾

と逃亡・潜伏するが、「宗知^{トモ}又募寺威不隨其召」(89)とあつて、興福寺の權威を背景にしてゐたから、この時期には、興福寺にも臣従してゐたか。

宗朝就妻緣 寄居大隅庄許也、非住人、仍不及進退之由、興福寺申之就中其身逃去、不知行方云々（前掲『賴資卿記』）

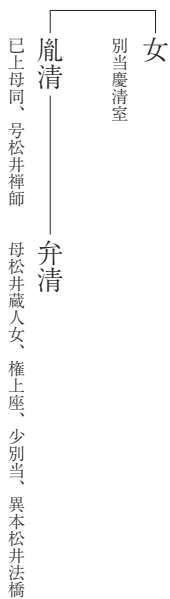
とあるのも興福寺の遁辞の可能性があるが、隣接する大住庄に松井氏の影響が及んでゐた事が知られる。

（人物關係）



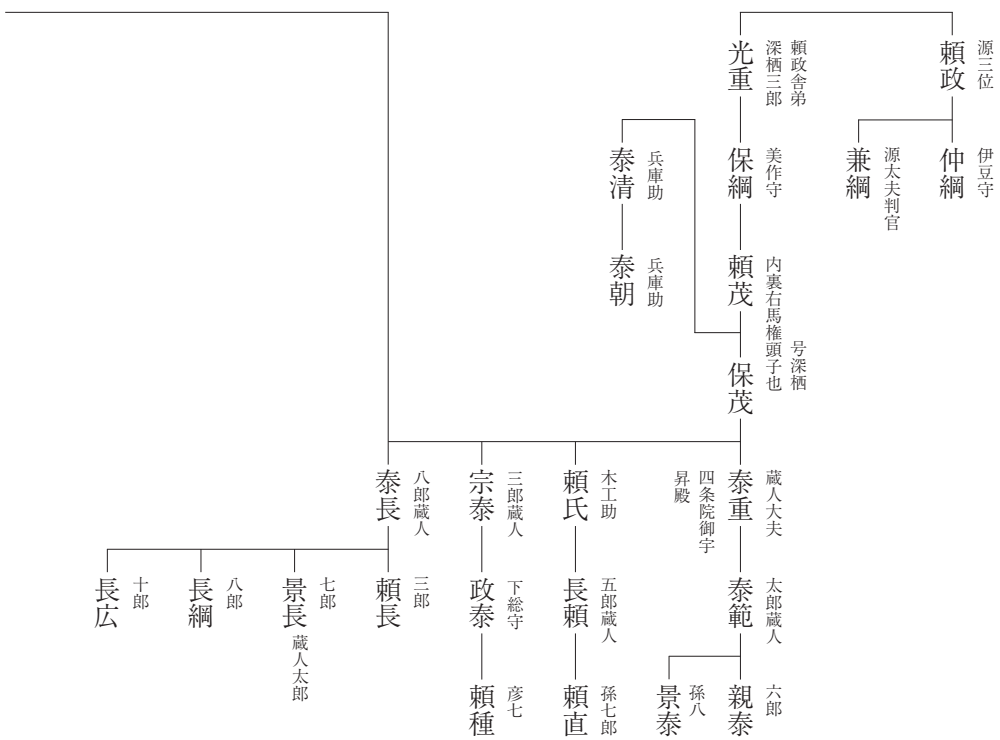
この内、宗長と八幡宮寺僧胤清との関係は、『石清水祠官系図』『石清水
壘宮事裏文書』（諸家系図纂）に、

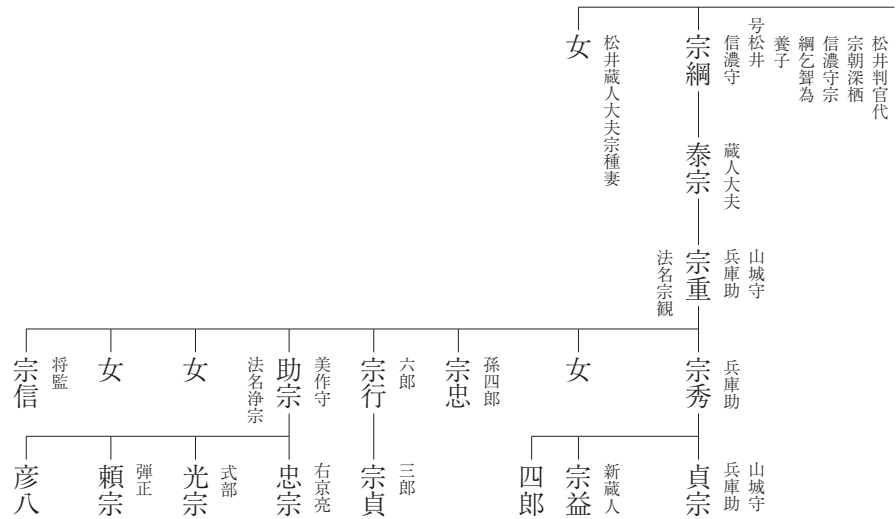
とあり、照合する (90)。



これからすると松井氏は、大住郷に隣接する山城国綴喜郡内の地⁽⁹¹⁾を名字とする在地領主と考へられ、その系図の御子左流子孫は仮冒であると評して、歴史時代の宗長以降が部分的ではあるが、史料の裏付けがあると評価出来る。

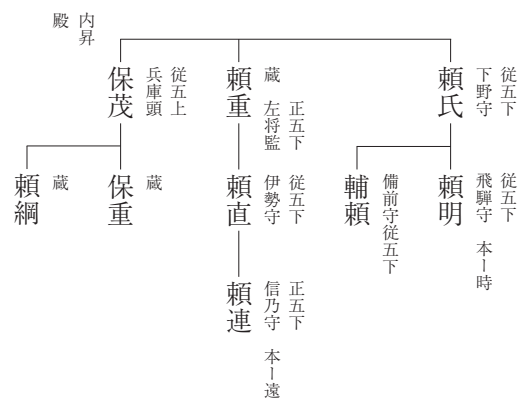
対して『蠹簡集殘篇』の深栖氏系図は（以下、蠹簡集本と略）





とあり、宗綱以下はほぼ「松井氏系図」に一致し、宗綱聶養子の記事も同じであるが、宗綱の姉妹が松井宗種の妻であつたとする点は本系図のみの記載で、その婚姻も他史料より確認出来ないが、山城南部に所領を持つ地縁、御家人身分が両氏を結び付けたものか。

蠹簡集本は深栖氏の中で保綱流のみで、『尊卑』と比較するに、B頼資流の保綱の「美作守」、北酒出本B頼綱流の康綱の「美作權守」の脇書が一致する。また大系本『尊卑』C頼茂流の大内守護頼茂子に、



とあり（他の族人は確認出来ず不審だが）、保茂を頼茂の子とし、保（泰重）を掲載する点、一致するが、脇書及び頼綱の有無からすると、『尊卑』・『宇野氏系図』の引き写しでない事は確かである。

頼茂と保茂の關係は未確認で、著名な頼政流を仮帽した共通伝承に基づく事に過ぎない可能性もあるが、仲正流と光重流の親縁との説明も可能で、他の箇所からすると蠹簡集本の深栖氏系図を評価して良い。松井氏系図同様、族人の多くは実在が確認出来ないが、拙稿①で『尊卑』に見えなかつたとした木工助頼氏・八郎藏人泰長が確認出来、後者を「保持」と誤つたとすれば、「宇野氏系図」とも一部一致する事になる。また『吾妻鏡』文応元年（一二六〇）十一月八日条に見える深栖兵庫助は、蠹簡集本の泰朝に充てられるからである。現在の所、深栖氏の系図は、蠹簡集本に拠つて良いだらう。

五、『太平記』の深須入道と松井蔵人

『太平記』に、元弘三年（一一三三）、笠置を落ちた後醍醐天皇を捕縛した山城国住人として、

深須入道・松井ノ蔵人（玄玖本卷三「先帝被囚給之事」）⁽⁹²⁾

を挙げる。一部伝本には、

深栖入道文訛・松井ノ蔵人大夫俊晴（竜門文庫蔵豪精本）

と諱があるが、採用する必要は無いだらう。

天皇を捕虜にすると云ふ異様な事件への関心が、その捕縛者にも注意を集めたと考へられるが、『花園宸記』元弘元年十月一日条に、

仲成朝臣云、所領之内号安王丸、山中有入、仍深津、馳来取之、即

先帝也云々、資明又申云、宇治住人房資已奉迎先帝・妙本院宮等之由、

松井蔵人某、又同奉取之云々（増補史料大成）

と、四つ仮名が異なるが、北酒出本（B頼綱流）にも「深津」とあり、両称が通用したと考へられる。更に前者は、『武家年代記裏書』元弘元年九月二十九日条（増補続史料大成）に、

先帝又御幸他所之処、河内国御家人深栖尾張権守奉懷取之云々

また『光明寺残篇』元弘元年条⁽⁹³⁾に、

先帝タカノ山江御落之処、山城国住人深栖□郎入道参向有王山、告申

陸奥守殿

と仮名・官途に相違があるが、深栖氏と確認できる。

『太平記鈔 音義』・『太平記賢愚抄』（慶長十二年刊本）⁽⁹⁴⁾には、「ミス」の訓があり、西源院本が「三栖入道」と振仮名をし⁽⁹⁵⁾、『参考太平記』（元禄四年刊本、電子公開による）や、天正本を底本とする新編日本古典文学全集『太平記』も「ミス」に従ふが、『増鏡』卷十五「むら時雨」に、

山しろの国の民にて、ふかすの五郎入道とかいふもの、まいりか、りて、あむないきこえたるしも、いとめざましう、口おし（蓬左本〔新

訂増補国史大系）

とあり、「ふかす」として良い⁽⁹⁶⁾。それでも蠹簡集本によつても比定できないが、問題の深栖氏の一族と見て良いだらう。

拙稿では、共に登場するこの松井蔵人を北酒出本に見える為義庶子松井蔵人季重の子孫に充てたが⁽⁹⁷⁾、日本歴史地名大系『京都府の地名』一三三頁が指摘する様に、山城南部に所領を持ち、深栖氏と縁戚にある御家人の藤姓松井氏と改めたい。但し同様、問題人物は蠹簡集本に見当てられない。

深栖氏のその後については詳細不明であるが⁽⁹⁸⁾、以上、改めて中世武家、且つ源氏の名門御家人として中世存続し、軍記物語にも登場する事に留意すべきであらう。

注

- (1) 「溢れ源氏考証補闕」（山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告）三十四、平成十九年三月）、以下拙稿①と略。
- (2) 日本古典文学影印叢刊による。島原本（国文学研究資料館の電子公開）。古活字本（日本古典文学大系）も同。
- (3) 覚一本『平家物語』卷十一「嗣信最期」（日本古典文学大系）
- (4) 田中本卷二に拠るに、下総下河辺庄住とするが、「小なこん入道しんせい」のち、かたのをち、みさ、きのすけと申人のちやくし、みさ、きの兵衛」（紙焼写真）とする。赤木本は傍線がなく（貴重古典籍叢刊）、橋本・芳野本（共に汲古書院）・天理本（伝承文学研究資料集成『義経双紙』・慶応大本（電子公開）・岩瀬文庫本（紙焼写真）では、遮那王下向の道筋の不自然を改める為か、下野国とし、母方の伯父とする。
- (5) 薮本勝治氏「『義経記』の金売り吉次と陵兵衛」（『国語国文』七十九ノ十一（平成二十二年十一月）、以下薮本氏論とする）・五味文彦氏『源義経』「諸陵助重頼と義経」（平成十六年十月）、保立道久氏『義経の登

場 王権論の視座から』第三章六「平泉への逃亡―源頼政との所縁」(平成十六年十二月)、山下宏明氏『中世の文学 平治物語』補注四二三(平成二十二年六月)。

(6) 宮内庁書陵部蔵谷森本同(紙焼写真)。佐竹本はA-C何れも基国以下を掲載しない(秋田県公文書館蔵佐竹文庫(宗家)蔵一卷)。

(7) 拙稿「菊大路本『清和源氏系図』覚書」(『山形県立米沢女子短期大学生活附属研究所報告』四十七、令和二年三月)、以下、菊大路本(東大史料編纂所の写真帳)と略し、拙稿②とする。

(8) 大日本古文書『東大寺文書』一二三―五―四「紀宗忠玉井莊下司職讓状案」(承久四年(一二三二)二月)の「深洲源藏人」は、編者の比定では保茂とする。拙稿①では北酒出本A頼資流(後掲)の脇書から康綱と考へたが、保茂の可能性もあらう。

(9) 『大分県史料 十一 速見諸家文書』の翻刻。以下、「宇野氏系図」と略。

(10) 此处では山口県公文書館蔵冷泉本による(鍋島本も同(東大史料編纂所の謄写本)。東大史料編纂所蔵『諸家系図』巻四十五「洪川」は波線部を欠く(電子公開)。

(11) 東大史料編纂所蔵の謄写本による。以下、浅羽本と略。

(12) 拙稿「『洪川系図』の成立とその史料的価値について(上)・(下)」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』三十七・三十八、平成二十二年三月・同二十三年三月)参照。猶、菊大路本の深栖氏流は重頼流のみであるが、そこにも他系図に見えない資重が釣られる。頼資流として、

後二条関白 二郎 諸陵助 高松院藏人 判官代
基国——光重——頼重——仲重——資重

とあるのがそれだが、拙稿①では脇書の位置を誤つてゐたので訂正する。

(13) 秋田県公文書館佐竹文庫(宗家)蔵写本。

(14) 名古屋市博物館本(名古屋博物館資料叢書・元和古活字本(『諸本集成倭名類聚抄 本文篇』)。

(15) 天理図書館善本叢書による。

(16) 拙稿「溢れ源氏考証(下)」(『米沢国語国文』三十・三十一、平成十四年十二月)

(17) 行家は以仁王挙兵時に八条院藏人に任じられ(『吾妻鏡』治承四年四月九日条(新訂増補国史大系)、矢田判官代義清にも八条院判官代とする系図(『尊卑』・北酒出本)が有る。

(18) 書陵部蔵柳原本の『藤原氏系図』(柳八二二)同。

(19) 『工藤二階堂系図』では兄を維房とし船越四郎大夫、清定を「山城権守」とする(内閣文庫蔵『藤原姓吉河系図』では「入江山城権守」とする(電子公開))。『天野系図』では「船越馬允」景兼を維綱・清定の兄弟とする。共に諸家系図纂による。『駿州岡部系図』も「入江権守清定」(『諸家系図纂』)とする。

(20) 諸家系図纂(内閣文庫蔵)所収。以下、綱要本と略。

(21) 『新板大系図』二十二も同(共に内閣文庫蔵本の電子公開による)。同系の京都学・歴史館蔵東坊城本『系図』では、傍線部を「実」として正しく(猶、同本には朱筆で光重子孫が書き込まれるが、『尊卑』「仲正流」よりの抜粋であらう。以下、東坊城本とする)、同系の綱要本・京都大学附属図書館蔵菊亭本『系図略』・東大史料編纂所蔵徳大寺本には、脇書が一切ない。久下本(『久下文書』「源氏物系図」(室町末期写。東大史料編纂所の紙焼写真))には光重が掲載されない。

(22) 『大日本史料』三二之二、同日条所収。

(23) 『中右記』(大日本古記録)・『江記』寛治七年正月十九日条の院号定(東山御文庫本『院号定部類記』(紙焼写真))。

(24) 秋田県公文書館佐竹文庫(宗家)蔵。

(25) 鎌倉幕府成立以前に藤原姓の毛利太郎景行が存在し(上杉和彦氏

「日本中世の伝承と相模国毛利荘」〔『文化継承学論集』三、平成十九年三月〕、源義家の子義隆も「毛利」を名乗るが（『吾妻鏡』治承四年九月十七日条・文治元年九月三日条）、系図の人物との関係は不明。

(26) 『扶桑略記』 康平七年九月十六日条・『百鍊抄』 康平五年十二月十八日条（共に新訂増補国史大系）・『清辨眼抄』『流人事』（内閣文庫所蔵史籍叢刊 古代中世篇第三卷所収）。

(27) 菊池紳一・宮崎康充氏「国史一覽」〔『日本史総覧 二 古代二・中世一』参照〕。

(28) 中務丞国輔は『中右記』 康和五年十二月九日条・『朝覲行幸部類』所収『江記』 長治二年正月五日条に確認（続群書類従）。

(29) 東大史料編纂所蔵『古系図集』では勘解由判官国宗のみ釣る。猶、北酒出本の国宗の流罪記事は頼資脇書であらう。

(30) 同系本の異同を見るに、『新板大系図』二十二は同。1・3・4・6菊亭本―なし、2菊亭本―「〇」、3・5菊亭本―「後拾遺作者」、7徳大寺本・東坊城本―「イ」、8菊亭本・東坊城本―「等」、9菊亭本―「ぢ」で、菊亭本の頼綱、浅羽本・綱要本は、異同が多いので別掲すると、

（菊亭本）

三河守

左衛門尉從四下

頼綱

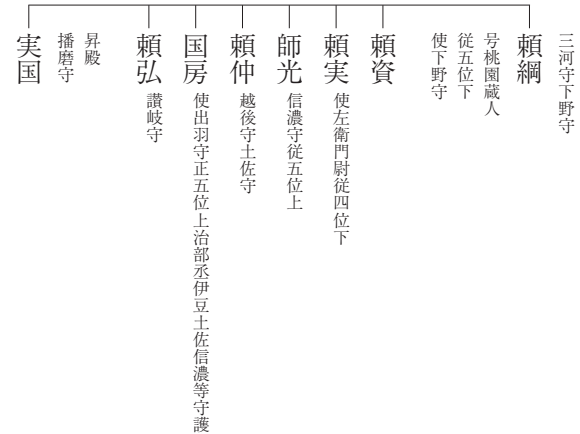
母尾張守仲清女

号多田

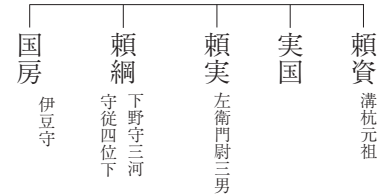
永長二七二出

後拾遺作者

（浅羽本）



（綱要本）



久下本は接続を誤るが、頼資、頼綱、国房を挙げる。

(31) 但し国房以下を誤つて頼綱子に繋ぐ。

(32) 『龍ヶ崎市史 中世史料編』所収。

(33) 同系図については、拙稿「『尊卑分脈』近似室町後期写清和源氏系図について」〔『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四十四、平成二十九年三月〕参照。

(34) 原装影印古辞書叢刊による。

(35) 『私家集大成 中古二』の島原本による。

(36) 傍線は『西行上人談抄』（『日本歌学大系』二）にあるごとく「よはひ三十の時」とあるべきだらう。『勅撰作者部類』「六位」では「藏人右衛門尉」とあり（書陵部蔵本による）、顕昭『後拾遺抄注』にも「其身六位之時夭亡」（『歌学大系 別巻四』）とあるから、系図の「五位」の脇書は誤りであらう。

- (37) 『後拾遺和歌集』の頼実・頼綱勘物でも仮名・兄弟順なし。陽明文庫蔵伝為家筆『後拾遺和歌抄』(陽明叢書『後拾遺和歌集』・太山寺本(藤本一恵氏『太山寺本後拾遺和歌集とその研究』・彰考館本『後拾遺和歌集』勘物・早大本『後拾遺和歌集』(共に上野理氏『後拾遺集前後』所収)も同様。『和歌色葉』では他に「左衛門尉藏人源頼実 美乃守頼国男」とあるのみ。
- (38) 東大史料編纂所蔵奥田貫昭氏蔵謄写本。
- (39) 井上宗雄氏『平安後期歌人伝の研究 増補版』第四章一「頼綱」(昭和六十三年十月)。以下、井上氏論と略。
- (40) 伏見宮本『御産部類記』所収「経信記」承暦三年七月十五日条(凶書寮叢刊)・『水左記』康平七年十月十九日条(増補史料大成)。
- (41) 『水左記』承暦四年七月二十九日条。
- (42) 『春記』同十月七日条(増補史料大成)。
- (43) 『春記』同十月三日条。
- (44) 陽明本廿卷本歌合所収「永承〔四一七〕年九月十九日関白左大臣頼通家藏人所歌合」(萩谷朴氏編『平安朝歌合大成 増補新訂』一四九。以下「大成」と略)。
- (45) 『定家記』同五日条(陽明叢書『平記・大府記・永昌記・愚昧記』)
- (46) 『百鍊抄』十二月二十八日条。
- (47) 『大間成文抄』十「消様」(吉田早苗氏校訂本による)
- (48) 『宮寺縁事抄』「臨時祭(治暦三年)」(大日本古文書『石清水文書(田中文書)』)
- (49) 市川久氏『藏人補任』同年条。
- (50) 内閣文庫蔵和学講談所本による。
- (51) 『同』同十月三日「源頼仲入道」と同一人。
- (52) 『朝野群載』卷五「藏人所等第勘文」(新訂増補国史大系)
- (53) 陽明本十卷本歌合「永承四年十一月九日内裏歌合」(『大成』一三六)
- (54) 『康平記(定家記)』同九月二十一日条(続群書類従)。
- (55) 十卷本歌合所収(『大成』一二三)。同時に頼実は「藏人所雑色」とある。
- (56) 『中右記』永長二年(一〇九八)閏正月二十七日条。
- (57) 廿卷本歌合所収「天喜四年四月三十日皇后宮歌合」(『大成』一六三)
- (58) 『康平記』同七月十七日条。
- (59) 『魚魯愚抄』五「小書出書様」に延久四年補任が見え(古代学協会編『史料拾遺』五所収)、『水左記』承保二年十月三日条に在任記事がある。
- (60) 『水左記』承暦四年五月十一日条。
- (61) 『為房卿記』同二十二日条。
- (62) 『中右記』同二十三日条。
- (63) 『本朝世紀』康和元年正月六日条(新訂増補国史大系)。
- (64) 『本朝世紀』二十三日条。『時範記』同年四月二十二日条(『時範記逸文集成』)に現任。
- (65) 『中右記』同五日条。
- (66) 『中右記』・『後二条関白記』同日条。
- (67) 『朝野群載』卷二十六「勘解由使続文」
- (68) 国文学研究資料館蔵写本による。
- (69) 『後二条関白記』永長元年三月十七日条。
- (70) 井上氏論では、薩摩守の官途があるとするが、永承七年(一〇五二)に薩摩守現任の「実国」(『康平記』康平三年正月二十八日条)は菅野氏であらう。康平元年(一〇五八)十月の『東大寺文書』「皇后宮大夫家公驗紛失状案」に「前薩摩守菅野」(『平安遺文』九一〇)と署名があり、三条院主典代に任じられた「主税助菅野実国」(『小右記』長和五年「二〇一六」正月二十九日条。寛仁三年(一〇一九)には主頭税(『同』十二月十三日条)とあるからである。
- (71) 東大史料編纂所蔵の謄写本による。

(72) 共に「駿河守護〔今川範国〕書下写」〔『静岡県史 資料編六 中世二』一八八・一八九また二〇三・二〇四。以下、『静岡』と略し、資料編の巻号、文書番号を挙げる。『静岡』未掲載は大日本史料による）

(73) 「松井助宗軍忠状写」〔『静岡六』一六三・二〇九・二二六〕

(74) 「足利尊氏下文写」〔『大日本史料』六之十六、同二十五日条所収〕

(75) 「將軍〔足利尊氏〕下文写」〔『静岡六』四九一〕

(76) 「足利直義下文写」〔『大日本史料』六之十六、同十八日条所収〕

(77) 「今川貞世書下写」〔『大日本史料』六之四十四、同十日条所収〕

(78) 「遠江守護〔今川仲秋〕書状写」〔『静岡六』一一三二〕

(79) 「今川貞世書状写」〔『静岡六』一二七〇〕

(80) 「鎌倉遺文」一七二一九（正応二年十一月）

(81) 「桂文書」〔上杉重能施行状〕〔『大日本史料』六ノ九、貞和元年十月十八日条所引〕

(82) 「草野文書」〔今川貞臣書下〕〔『南北朝遺文 九州編』六〇一五〕

(83) 「久我家文書」五一九「室町幕府奉行人連署奉書」〔国学院大学久我家文書編纂会刊行本〕

(84) 図書寮叢刊による。

(85) 「鎌倉遺文」四四三〇

(86) 「石清水文書（田中文書）」六六一「石清水八幡宮護国寺所司解」〔嘉禎元年十二月〕・前掲「薪莊・大隅莊相論記」

(87) 「頼資卿記」嘉禎元年閏六月二十日条〔『大日本史料』五之十、嘉禎元年閏六月十九日条所引による〕。

(88) 「中臣祐定記」嘉禎二年正月十五日条所引「関東御教書〔嘉禎元年十二月二十九日〕」（増補続史料大成『春日社記録』）

(89) 「中臣祐定記」同二年二月二日条所引「長者宣」。

(90) 「石清水文書」別口四十八所収「紀人系図」（東大史料編纂所謄写本）でも、

胤清——弁清

号松井禪師

寺任少別当

法橋

とあり、胤清弁清の親子関係は『宮寺縁事抄』『御祈臨時賞』嘉祿二年三月十一日条に見え（『石清水文書（田中文書）』）、前者は『梅宮神社文書』『清原正行田地寄進状案』（『鎌倉遺文』二五四〇〔承久元年八月〕）に、葛野郡梅津郷内の田地が「松井法橋御房領」に隣接とあり、『古今著聞集』十六「興言利口」「喜多院御室与老狂女問答事」に見える守覚法親王と同時代の「松井法橋」も同人か（新訂相補国史大系）。

(91) 『続日本紀』天平神護元年八月一日条（新訂増補国史大系）

(92) 勉強社の影印による。他に島津本・三春本・米沢本・相承院本・書陵部本・松井本・天正本に「ふかす」の読仮名がある。諸本、表記は「深須」とするが（築田本は「ふかす」と表記）、松浦本が「深栖^{フカス}」とし、「一須」と右に傍書。何れも紙焼写真または電子公開。

(93) 史料纂集『光明寺文書』一〇による。

(94) 共に内閣文庫本の電子公開による。

(95) 『軍記物語叢書 未刊軍記物語資料集二』の東大史料編纂所謄写本の影印による。織田本振仮名なし（尊経閣文庫蔵）。

(96) 御所本・永正片仮名本・平松本・近衛本・桂宮本（古典資料類従『真寸鏡 桂宮本』）同。阿波国文庫本は「フカスノ太郎入道」（傍線は佐藤高明氏「片仮名本増鏡の研究 本文資料篇」の翻刻による）。平松本・近衛本は電子公開。

(97) 「北酒出本『源氏系図』の成立と史料的価値について」（『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』二十七、平成十二年三月）

(98) 室町時代中期、武蔵国神奈川に「ふかす殿」が存在した事が分かるが（『米良文書』四六六「借錢状」〔寛正五年七月〕・四七六「旦那売券」〔寛正七年三月〕）、詳細不明。史料纂集『熊野那智大社文書』による。

